

医療権力論

看護界・医療界はいま

医療者は、医療者の理解したことを患者に語りかける。しかし、その語りは決して一般の患者さんが容易に理解できる言語体系にない。いわゆる「看護師語」「医者語」である。だから、医療者の理解していることが患者に伝わらない。

医療者には温情主義者が多いが、これを英語だとパターンリズムと呼ぶ。たとえ患者のためを思う言葉であっても、患者が苦しむ原因になることもある。というより、よかれと思っているからこそ、その言葉が孕む無言の圧力の存在に気づきにくく、患者の苦しみに接近できなくなる。

「患者のために」「よかれと思って」発した医療者の言動が患者を困らせてしまう。この問題は、1970年代初頭にE・フリードマンによって「パターンリズム(医療父権主義、家父長的温情主義)」の問題として告発された。フリードマンは、主に医師と患者の権力関係を論じたが、同様の問題は看護職者と患者、医師と看護職者の間にも存在する。医療者-患者間、医療者-医療者間で生じるこのパターンリズムは、医療における権力問題として、より大局的見地から批判的に吟味されるべきである。

今回の特集では、日頃より質的看護研究に携わってきた人たちに執筆者になってもらった。そして、日本赤十字看護大学の教員として、大学院生として、どこかの段階で袖振り合っている。その研鑽の中で、権力に敏感になっていった。フェミニズムに敏感になっていった。社会構成主義に敏感になっていった。

大学院の院生室で熱く議論した発展形としての論点がここにある。

フリードマンの告発から40年以上を経た現在も、日本の医療界ではパターンリズムが健在であり、より深刻なかたちで進行していることを、執筆者たちの研究は告発してくれるだろう。

企画：中木高夫(天理医療大学医療学部看護学科教授)